

「腐った言葉と善い言葉」

エフェソの信徒への手紙 4章25～32節

聖学院大学 人間福祉学部チャプレン 五十嵐 成見

今年は宗教改革 500 周年です。キリスト教の中でプロテスタントが生まれた歴史的な意味を問かける年でもあります。宗教改革がもたらしたキリスト教的精神の大事な根幹の考え方は、「神のこゝば」を重んじる、ということです。今回のシリーズは「御言葉に聞く」です。人間の言葉ではなくて、何よりも神様の御言葉を聞こう！そう呼びかけたのが、宗教改革、という運動です。

でも、神様の御言葉を聞く、ということはどういうことでしょうか。神様の言葉を聞いた私たちが、善い言葉を語るができるようにする、あるいは、なる、ということです。今日の奨励題は、「腐った言葉と善い言葉」です。善い言葉を語る、神の御言葉を聞いたことのしるしになるのです。

では「善い言葉」というのは何でしょうか。今日の聖書箇所 29 節の後半にこう書いてあります。「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。」私たちが言葉を語る時に、その言葉を聞く人の心が破壊されるのではなくて、「造り上げられる」のに役立つ言葉を語りなさい、ということです。それは、造り上げる言葉とはいったいどういう言葉なのでしょう。

まず先に、私の痛い経験からお話しいたします。私は、かつて、このいい言葉を語るができなかった過去を持っています。大学時代、仲良くさせていただいた女性の先輩がいました。その先輩は舞台俳優志望でした。なので、よく芝居などを観に行っていたのです。一度、私のことを演劇鑑賞に誘ってくれて、一緒に、帝国劇場にミュージカルの「エリザベト」を見に行った思い出もあります。

やがて私は牧師になるために、東京神学大学という神学校に入学しました。入学して半年くらいたったころ、久しぶりにその先輩から電話が来ました。受話器越しに話を聞きました。舞台俳優のオーディションに落ちて、辛い思いをしたと言うのです。本当に自分が、この道を追いかけていいのかどうか、わからなくなった。自信が持てなくなった。そういう落ち込んだ心を聞いてほしくて、私に連絡しに来たのです。連絡してきてくれたのです。

私はどうしたか。その頃、神学大学で「牧会カウンセリング」という講義をとっていました。牧師としてカウンセリングをする場合に関する講義です。その講義で、牧師は聞き役に徹することが大事なのだ、と習いました。そのことを思い出しました。だから、私は、彼女の話だけをただよく聞きました。そうですよね、そうですよね。教科書通り、講義でいわれた通りです。これが牧師の第一歩なのだと思います。傾聴に徹したのです。

だんだん、彼女の様子が変わってきました。ただ、大学の講義で習ったような反応ではありませんでした。僕に対して何か求めているような口調になっていきました。

しばらくして、ついに彼女が爆発しました。こういわれたのです。「なんで、聞いているばかりで、何

も言ってくれないの？私が、今、求めているのは、ただ聞いてくれるだけじゃないの。大丈夫、次はきっとうまくいくよ、諦めないで頑張ろう！という言葉なの！私のことを励ましてくれる言葉が、私は聞きたいの！」

しまった、と思いました。私は教科書通り、習った通り、マニュアル通りにその場を、いわば片付けようとしていたのです。でも、大事なことに目を向けていませんでした。その人が本当はどういう言葉を求めているのかに心を向けることです。もつという、その人の心が、諦めたくなるような現実の中で、その心をすっと立ち上がらせるような言葉をかけることです。傾聴はとても大事です。傾聴しなければ、相手が何を考えているのか、相手が何を望んでいるのかがわからないからです。また、ただ傾聴に徹することの方がいいことももちろんあります。

しかし、それが必ずしもすべてではありません。だから、注意深く、今日の聖書箇所のエフェソの信徒への手紙は「必要に応じて」、というのですけれども、より積極的な言い方、能動的な言い方で、私たちに求めるのです。「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を語りなさい。」

きっと彼女はこういう言葉を求めていたのだと、今、思い起こします。彼女の心を造り上げるための言葉です。彼女の心が、厳しい現実の中にあっても、前を向いて生きていこうと思うための一言です。そのような言葉が、あの時、彼女にとって唯一必要な言葉だったのです。

つくりあげる言葉を語ろう。そう聖書は勧めます。しかし実際私たちの生活はどうでしょうか。自分が使っている普段の言葉を振り返ってみると、「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を語る」ことよりも、むしろ、人の心を台無しにしてしまうような言葉を言うてしまうことがしばしばではないでしょうか。本日の聖書箇所は「悪い言葉を口にしてはなりません」と書きます。悪い言葉とは何でしょうか。ただ、悪口を言う、文句を言う、そういうことだけではありません。ここに書かれている「悪い」という言葉は、ギリシャの言語では「腐る」、という意味を持っています。人の心を腐らせる言葉を語ってはなりません、というのです。

でも、私たちは本当にしばしば、何の悪気もなく、人の心を腐らせるような言葉を使います。小学生の時、バイオリンを習っていました。もともと、母がバイオリンを習うことを私に勧めていき始めた教室です。ただ、だんだんバイオリンを練習する楽しさを覚えていて、レッスンをしてくれているバイオリンの先生のようにになりたいな、と思いだし、練習の量を自分で増やしていました。ちょうどその時期、母と父が僕のことで話をしていたのを聞きました。父が、別に成見をバイオリニストにするために習わせているわけじゃないからな、と言ったのです。

その後、なんとなく、練習量を増やすことをやめてしまいました。あの時の父を責めるつもりはありません。ただ、あの時の言葉を今でも自分が覚えていることは、私の心に何らかの影響を与えたのではないかと思います。もしあのとき、父が、バイオリニストを目指して頑張ってもらいたい、と欲していたらどうだったでしょうか。現在、バイオリニストになっているかどうかはともかくも、その時は、頑張ってもらいたいと言われたら、きっとその言葉は、僕の心を腐らせるよりも、励ます言葉になっていたのではないのでしょうか。

さて、ここにいる皆さんは、いったいどちらでしょうか。人の心を腐らせる、あるいは挫けさせる言葉を使うのでしょうか。それとも、「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉」を使うのでしょうか。どちらも、言葉を使うことは一緒です。でも、もし言葉を使うことにおいてどちらも一緒だとするなら、人の心を造り上げる言葉を話す方が、どれだけ、お互いに気持ちよく暮らすことができるのではないのでしょうか。

こんなことがありました。娘の人見知りがとても激しい時期でした。誰にあっても、むっとした顔をして、内心僕は大丈夫なのかなあ、などと心配をしていたのです。たまたま、娘と二人で、家からちょっと離れたところある公園の敷地内にあるうどん屋に食事に出かけました。お昼時だったためにちょうど混んでいたのもので、相席をお願いされて、一人のおじさんと一緒になりました。おじさんは気さくそうな人で、私の娘を見ると、声をかけてくれました。ところが、おじさんが「こんにちはー」と話しかけても、うちの娘は、何も答えず、じっとその人の顔を見ているのです。私が思わず、「あんまり愛想がよくなくて困っているですよー」とつぶやきました。そうしたら、そのおじさんがこう切り返したのです。「落ち着いて、相手のことを見ているんだね。観察力がある子なんだねー」。

目が開かれる思いがしました。今まで、自分の娘の言動に対して、ただ否定的なことばかりを考えていました。けれどもその人は、プラスに評価した言葉を語ってくれたのです。私の心は、何か纏れた糸がすりと解かれたような気持ちになりました。そこから、自分の娘をそのまま受け入れられるようになったのです。これは、「善い言葉」の一つでしょう。

32 節では「互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによって赦してくださったように、互いに赦しあいなさい」とあります。「互いに親切にし、憐れみの心で接」すること。それは、なによりもまず、「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉」を獲得することから始まるのではないのでしょうか。

今、私たちのネット社会では、過激で、煽動的で、口汚い言葉が蔓延しています。それを面白がって私たちもうっかり使ってしまうかもしれません。私も最近、人のことを傷つけるようなことを、うっかり言ってしまったことがあります。皆、言葉を使っている限り、そういう過ちから逃れられなでしょう。でもだからこそ、「聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を語る」ことが、どれだけ私たちの生きる世界にとって、希望の光となることでしょうか。

言葉を、人の心をいつも励まし、立ちあげるために使うことができたなら、きっと、私たちの世界は、豊かになるでしょう。神の言葉は、私たちの心の豊かさを作り出します。それが、まさに、「互いに親切にし、憐れみの心で接」することにダイレクトにつながるのではないのでしょうか。

2017年10月4日 聖学院大学 全学礼拝(シリーズ礼拝)